

夢の甲子園 けが乗り越え

光星・成田(浪岡)「みんなが連れてきてくれた」

7日に甲子園球場で行われた全国高校野球選手権で、八戸学院光星は創志学園(岡山)を破り、2回戦進出を決めた。青森市浪岡出身の成田光佑(3年)は、足がつったチームメイトに代わり七回途中から出場。今夏直前のけがを乗り越えて立った夢舞台で、仲間への感謝を込めた二塁打を放った。

(野村謙)

「夏の県大会は無理。諦めて」。甲子園の県予選が始まる1週間前だった。練習試合中の打席で手元にボールが直撃。右手薬指を骨折し、周囲を数針縫う大けがを負った。夏前からスタメンとして起用されるようになっていた中での思わぬ不運。医師の言葉に、ぼつぜんとした。

仲間へ感謝の二塁打

入学後は周囲とのレベルの差を感じる日々だった。1年生ながら試合で活躍する同じく地元出身の野呂洋翔(木造中出)や織笠陽多(七百中出)の姿を見て、早く追い付きたいと焦りを募らせたことも。現チームになりベンチには入れたが、昨秋は納得いく結果を残せず。冬の間、自主練習で1日最低500回はバットを振り込み、今春は代打で得点に貢献できた。調子はさらに向上し、夏は先発出場が期待されていた。

「けがをした直後の練習は頭が真っ白で、グラウンドの脇に突っ立っている」としかできなかった」と振り返る成田。そんな中、小坂貫志部長に「お前、諦めているのか?」と問いかけられハッとした。動けなくても、チームのそばにいようと思った。練習ではひどきわ声を張り上げた。お前を甲子園に連れて行くから。仲間の言葉を信じたら、頑張れた。

県大会優勝の翌日には、医師の許可を受け練習を再開した。骨折はまた治っていないが、縫った傷口は問題ない。少しでも感覚を取り戻そうと痛みに耐えながら必死で練習し、甲子園メンバリーに滑り込んだ。

初戦は八回裏、先頭打者で打席へ。狙っていたスライダーを右前にはじき返すと、続く打者の適時打で本塁を踏んだ。試合を終え、「みんなが連れてきてくれた甲子園なので、仲間の気持ちを背負ってプレーしようと思っていた。打席に立ったらわくわくした」と万感の思いをにじませた。

母の亜矢さん(47)とともに応援に駆け付けた俊治さんは「けがで本人が一番悔しかったと思うが、甲子園で結果を出した姿を見て感無量。自慢の息子です」とたたえた。

次は愛工大名電(愛知)とぶつかる。成田は「強い相手だが、やり合えないわけじゃない。しっかり準備したい」と闘志を燃やした。

東奥日報社提供